

【マルク伯爵家】

王国の東に位置し、北の大草原に面する辺境領を治めるウイルの生家。

家の歴史は古く、千年以上も昔にこの地に入植してきたとされており、古代栄えた大帝国の末裔を自称している。双頭の馬の紋章を家紋にもつ。

国内有数の穀倉地帯を有しているが、辺境領だけあって領地の大半はまだ未開発の荒野や草原であり、今後の開発の余地が大きい。

【領地の屋敷】

大草原に面する小高い丘の上に建てられたマルク伯爵家の領地の屋敷では、令息ウイルが身の回りの世話をする四十人以上の女中たちと共に暮らしている。父親のマルク伯爵がめばしい男性使用人を連れて行ってしまったため、大貴族の屋敷にしては極端に男性使用人の数が少ない。

領地の屋敷には、周辺風景の核となつて屋敷の主人につくことが有利であると思わせ、地域への支配力を強める実利的な役割がある。それゆえに貴族は屋敷に強い思い入れを持ち、屋敷の価値を高めることに心血を注ぐようになることが多い。女中たちの愛情に囲まれて育つたウイルは、なおさら屋敷に強い思い入れを抱いている。

【王都の別邸】

ウイルの父親のマルク伯爵の住む王都の屋敷。執事・従者・従僕をはじめとして貴族家の格式を整えるために多数の男性使用人が雇用されている。伯爵家はここを拠点として王都の政争に関わっている。都会型の屋敷で、敷地の広さも限られているため自給自足することはできないが、金さえあれば特に困ることはない。

【銀狼族】

マルク領から遠く北西に離れた山岳と草原地帯に暮らす少数遊牧民族。

銀狼の名前を冠するに相応しい美しい銀髪と、野性の狼のような琥珀色の瞳を身体的な特徴とする。先祖代々まじないの方が伝わっていると言われており、近隣の部族から敬われ、同時に恐れられてきた。

これまで攻めこんできた外敵を狼にたとえられるほどの勇猛さで、ことごとく返り討ちにしてきた。近年、王国軍の火力のまえに為す術もなく敗退し、銀狼族の村は潰滅した。

【神子】

銀狼族の戦士の長であり人並み外れた身体能力を授かっている。ソフィアの腕力は猛獣の檻の鉄格子さえも曲げてしまうほどである。清らかな乙女でなければならず処女を失えば神与しんよの力も失ってしまうようである。

【神巫】

草原の神から授かった神託により、道を示す銀狼族の指導者。ソフィアによると神巫の予言は百発百中だが、肝心の予言の言葉は曖昧かつ不親切でそれほど万能なものでもないようだ。神子みこと同様に処女を失えば神託を授かる力も失うようである。

【王立学院】

貴族の子女の通う全寮制の寄宿舎学校。王立なだけあって非常に恵まれた教育環境にあるが、交友関係を作るために子弟を通わせている貴族も多く、どこか雰囲気のがんびりとしている。ウィルはここに三年在学していた。

【シャルロット女学院】

優秀な女性を輩出することで有名な女性教育機関。女性の社会進出が進んでいないこともあって女中養成所のような位置づけになっている。【マカニキ本1】女中長トリスはこの出身者。いまはトリスの妹のロゼとイグチナの娘ヴェラナがここで寮生活を送っている。